

集落と墳墓の立地からみた弥生～古墳時代の社会変化

～淀川・木津川流域を中心として～

若林邦彦

1. はじめに ～問題点の整理と分析方向～

初期農耕・国家形成期社会（弥生～古墳時代）の社会政治変動を説明する上で、淀川・木津川流域（京都盆地を含む）の考古学的研究は重要なモデルを提示する場となってきた。古墳時代には椿井大塚山古墳・平尾城山古墳・久津川車塚古墳・元稻荷古墳・鍋塚古墳・弁天山古墳などを題材に、古墳時代の地域首長の盟主古墳の移動・消長のモデル地域として注目を浴びてきた。もちろん、その前代の弥生時代の集団関係も取り上げられたうえでの議論もなされている。

著名な研究をあげれば、都出比呂志（都出 1974・1989）は、弥生時代にはこの地域の弥生高地性集落の分布と性格が論じられて集団関係が説明された。同時に、その連続体として、木津川流域では古墳時代前～中期に椿井大塚山古墳の周辺から久津川古墳群へ、桂川流域では向日丘陵にかかる領域からより低地部の領域へ、淀川左岸では交野台地・丘陵の森古墳群から淀川に近い牧野車塚古墳へと領域の首長墓が移動していることを指摘した。また、和田晴吾（和田 1998）は、木津川流域を素材に、全長100mを超える大規模古墳だけでなく、中規模古墳も含めた動態を詳細に論じながら前期・中期の中にもさらにこまかな時期差によって相対的に規模の大きな古墳を造る領域が、細かく移動し続けていることが指摘されている。和田は、むしろこの地域に大型前方後円墳がみえなくなり群集墳が増える古墳時代後期に大きな画期があると考えている。国家形成の本格的な変動を、この地域をモデルに説明している。話を首長系譜論にもどせば、近年、下垣仁志（下垣 2012）は、領域の中の古墳分布の動態だけでは「首長系譜」を描くことは難しいとして、領域内での銅鏡の保有状況を分析して、領域内の有力集団の存在を読み取る方法を提示している。さらに、森田克行（2011）や阪口英毅（阪口 2011）は、淀川右岸の古墳分布の盛衰をとりまとめ、中小河川流域ごとの大規模墳墓形成時期の差異に連動して、紫金山古墳・太田茶臼山古墳・今城塚古墳などの位置づけについて考察している。

すこしずつ論点は異なるものの、いずれの論者も各古墳群はその形成領域の近辺（数km～10km範囲）を造墓の主体集団と考え、古墳の規模・副葬品の内容から、そういった小地域間の優劣関係を論じてその小地域間関係の変化を首長系譜とその動態の反映とみている。また、奈良盆地では、坂靖（坂 2008）が、古墳群と領域に形成される集落群との関係から古代氏族とその領域形成について論じている。しかし、そういった古墳・古墳群の消長とその造墓集団と考えられる集落遺跡の動態との関係が詳細に論じられる例は、ほとんどない。奈良盆地の例も古墳と領域の関係がア prioriに前提とされたうえで議論が進行している。実際に、木津川流域では古墳時代中期に大規模古墳が形成される久津川古墳群近辺で、有力な集落などが形成される調査データは認めにくいようである。長い間、調査データの集成・比較自体が行われてこない状態が続いた、この問題はデータ収集と客観的な比較方

法の確立を経なければ論じられない。また、さらに都出が当地域をモデルとして注目した弥生時代の集団関係と古墳時代の動態についての連続性については、近年の議論は長く低調であった。近年、古代学研究会において、この問題を解消する取り組みが行われた（古代学研究会編 2016）が、詳細な比較検討は緒についたばかりといえよう。

一方で、2000年代を中心に、一方で、その前代の弥生時代については当地域においては集落遺跡の消長などが論じられている。伊藤淳史（伊藤 2005）は、京都盆地～木津川流域の弥生～古墳時代初頭集落動態を膨大なデータ集成を通じて分析し、継続的に遺跡形成がみられる領域とそうでない領域があること、古墳前期の大規模古墳はむしろ後者の地域にみられ、大規模古墳が有力集落形成領域と相関しない可能性を指摘している。有力古墳の形成に関する重要な指摘と言えよう。また、筆者（若林 2009）も同地域の淀川流域・木津川流域の弥生集落動態を論じる中で、淀川右岸・桂川流域・巨椋池周辺には複合型集落が分布するものの、淀川左岸と木津川流域にはそういった地域の核となる弥生集落（複合型集落）の形成がみられないことを指摘した。

さらに、古墳時代の集落研究としては、古川匠（古川 2014）が桂川流域を中心に分析を行い、首長墓系譜の異動に連動して集落分布中心領域が変化することや、古墳時代中期に桂川に近接する集落が激減するなどの指摘を行い、古代官道形成域に集落が集中し始めることを指摘している。

都出の視点を生かし、弥生時代～古墳時代における通時的な社会分析を行うためには、上記の研究成果が蓄積されている、淀川・木津川流域で長期にわたる集落・墳墓動態を観察し取りまとめることが有効と思われる。ただ、既往の研究を接合するだけでは、一つの基準をもった分析成果は提示しにくい。そのため、本研究では、淀川・木津川流域の集落・墳墓遺跡の発掘調査データを集積し、時間的・地域的動態の分析をこころみだ。別節で、そのデータについては公開しているが、本稿における分析に際しては、集落遺跡立地環境に注目したい。

特に注目するのは、水田耕作可能な環境と集落立地の相関である。古墳時代以前では谷水田の開発は顕著ではなく、河川氾濫原の後背湿地・自然堤防を含む領域が水田経営の基本と考えられる。これまで近畿地方の弥生・古墳時代の水田遺構の大規模なもの（代表例として、安満遺跡・池島福万寺遺跡・中西遺跡・志紀遺跡など）はすべてこのような環境に立地している。このような条件下では、初期農耕～国家形成期の集落遺跡は、低湿地を中心に分布することが自然なように思われる。しかし、後述するように、時期変化とともにその分布には偏りが現れる。この点に注目したい。つまり集落遺跡立地地点の集約性の有無の性格を水田耕作と相関する地形環境とのかかわりで検討することを、一つの分析基軸とする。

また、そのような集落遺跡分布に呼応する墓地形成の対応である。この墳墓形成という点については、墓制そのもののありかたが弥生時代と古墳時代で大きく異なる。そのため、単純比較は難しいが、どのような居住単位に対して墓地形成が看取できるかに焦点を当てて検討したい。個々の墳墓や古墳の動態の内容から地域社会を類推してきた過去の、古墳時代論とは一線を画し、集落動態を基盤に置きながら墳墓・古墳動態を位置付ける方法をとることを本稿の主眼としたい。

そのベースとなるのが、別節で示した集落遺跡の発掘調査による消長データである。これについて

は、本研究での修正作業に加え、古代学研究会による集成作業（古代学研究会 2016）の成果も加味してデータ作成を行った。そのうち、本研究の主眼である淀川水系・木津川水系についてデータの状況を説明し、その後上記の水田可耕地および墓地との相関について論じたい。

2. 淀川流域での実態

ここでは、淀川水系（島本町・高槻市・茨木市・枚方市・交野市・寝屋川市）を中心とした領域についてとりあげ、竪穴建物・平地式住居・柱穴・小溝・井戸・土坑といった居住遺構の検出された遺跡の分布変化を詳細にみていきたい。また、古墳時代については、主要な古墳および群集墳を明示して、墓域と集落の関係を考察する素材としたい。

(2.1) 弥生前期～古墳初頭（BC 6C～AD 3C）

まず、弥生前期の状況（図1）からみてみよう。水稻農耕が開始されたこの時期には、水田適地となる低湿地部、淀川の流路帯および、北摂山地からの流路帯が形成する平野部に居住遺構検出地点が集中している。扇状地中部もしくは段丘上・丘陵上にはほとんど居住遺構検出地点はみあたらない。これは、水田地点に隣接して集落が営まれていたことを示している。弥生時代中後葉には、淀川右岸では安満遺跡において、径100mを超える当時期としては比較的大型で継続型の集落が営まれる。高槻市安満遺跡では近年の調査で、弥生時代前期の水田が広域に営まれていることが確認されている。安定集落の形成は、このような低湿地の水田施設群の大規模経営と不可分な関係にある。また、水田遺構などは見つからないものの、茨木市東奈良遺跡でも弥生中期中後葉に遺構・遺物の検出数が増加し、同じような安定継続型の集落形成が確認できる。この遺跡も千里丘陵南東方向に所在する低湿地帯に位置している。段丘地形が発達し沖積地面積の少ない淀川左岸では、船橋川下流域と淀川氾濫原にのみ、当該期の集落遺跡が確認される。この時期には、どの遺跡でも方形周溝墓などの墓地の形成は明瞭ではなく、集落と墓地の関係は明確ではない。

弥生時代中期（図2）になると、低地部の遺跡は同じように分布し、やや増加傾向がある。それとともに淀川左岸の広い中位段丘面を形成する枚方・交野台地上に、居住遺構検出地点が確認され始める。しかし、その分布は、段丘面の縁辺のあくまで低湿地を望む地点が主体である。人口増加に伴い段丘上の集落は増え始めるが低湿地の水田設営可能領域に隣接しする原理を維持しながら集落が占地することがわかる。このような低湿地をのぞむ段丘上には集落とともに、中期前～中葉に招堤中町遺跡、交北城ノ山遺跡で比較的大規模な方形周溝墓群が営まれる。現在のところ、これらの墓地遺跡の造墓主体となる集落を特定することは難しいが、墓群そのものの立地条件は、低湿地をのぞむ段丘縁辺であり、集落立地に近似している。人口増に伴う集落増加に呼応して、弥生中期に形成された集落群が造墓主体と考えて問題ないだろう。弥生時代中期後半には、寝屋川市太秦遺跡とその近接地で、高位段丘上の集落の近くの段丘上に方形周溝墓群が営まれる大尾遺跡が確認されている。段丘・丘陵上で集落と墓地がセットで営まれる例は弥生時代中期を通じて確認され続ける。

一方、淀川・芥川・安威川の氾濫原で後背湿地が広域にひろがる淀川右岸では、低湿地の遺跡数は大きく変化しない。同時に扇状地の遺跡数が若干増加する。ただ、低湿地の遺跡には安満遺跡や東奈

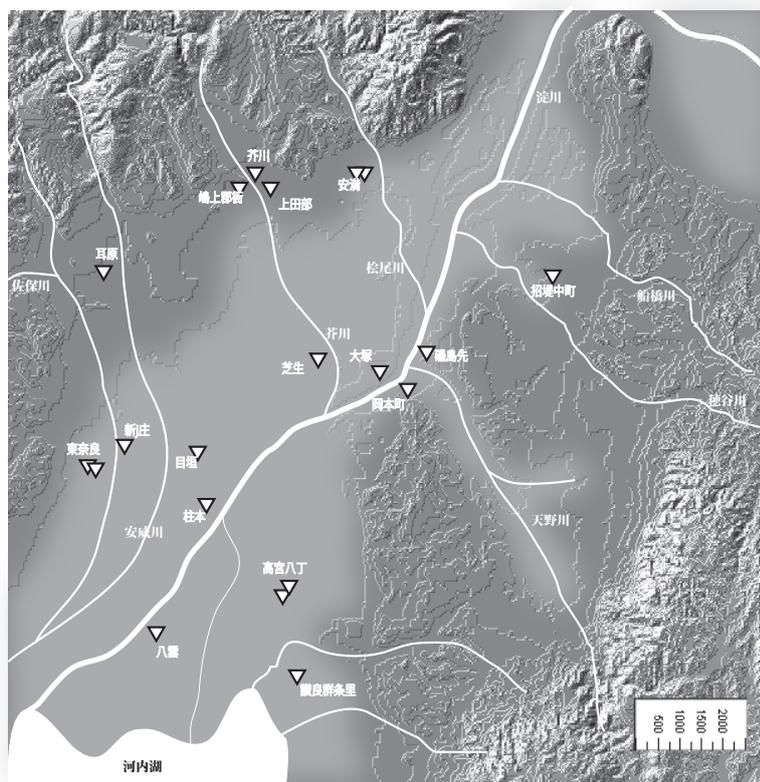


図1 淀川流域の弥生前期集落遺跡分布

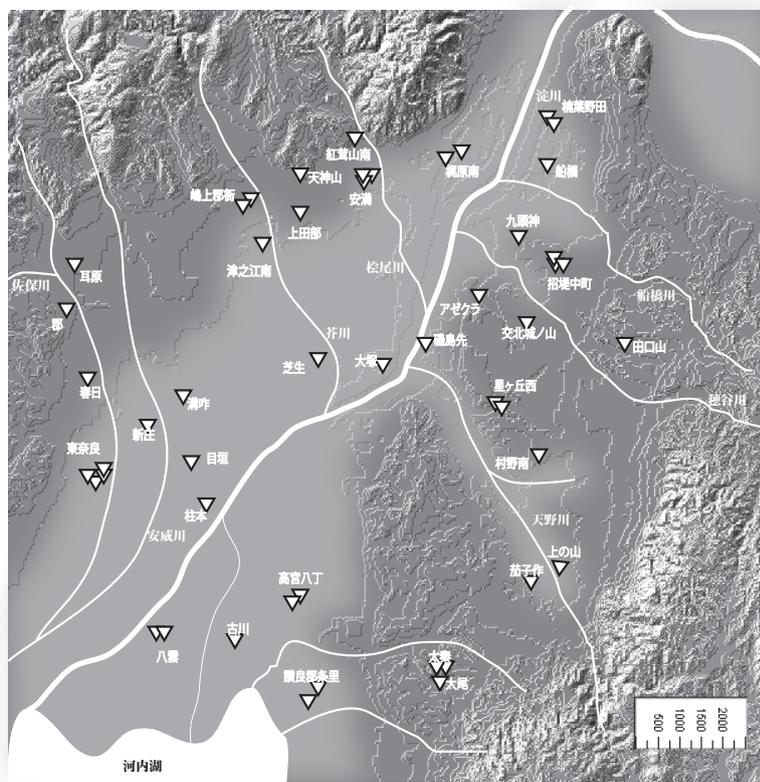


図2 淀川流域の弥生中期集落遺跡分布

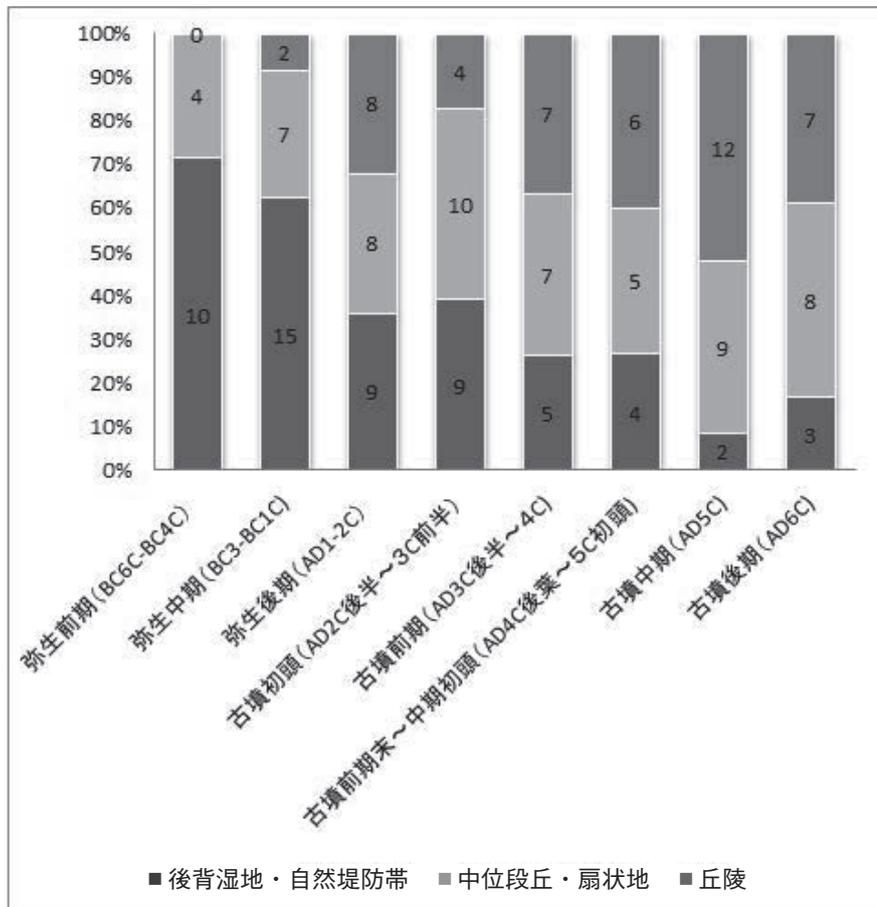


図9 淀川右岸集落検出地点の立地変化

良遺跡のように、径100-200m規模の居住域を複数もち、集落全体として径500mを超える規模の遺跡が出現する。こういった遺跡には、個々の居住集団が形成する方形周溝墓群が複数形成されている。低湿地の中の微高地に形成された大規模遺跡は、水田可耕地に隣接して形成されると同時に、その居住地の傍らに方形周溝墓を有する状況が看取できる。もちろん、それ以外に、高槻市梶原東遺跡など方形周溝墓群のみが確認されるいせきもあるが、その立地は低湿地で水田可耕地に隣接して（おそらく集落も近接して）形成されている。大規模遺跡でも中小規模遺跡でも、居住地・水田・墓地在近接して営まれる状況が想定できる。居住集団ごとの水田経営や社会関係形成の個別性の強い状況が指摘できよう。

弥生時代後期（図3）～古墳時代初頭（庄内式期）（図4）になると、低湿地の遺跡分布は大きく変化しないものの、段丘上・扇状地中部あるいは丘陵地の集落立地が増え始める。集落が水田経営地近くに存在する原理は大きく変わらないものの、耕作地と集落が大きく離れる立地パターンも見え始めることがわかる。この時期になると、安満遺跡や東奈良遺跡では遺構形成はみられるものの、複数の居住域を含みこむ集落遺跡という構造ではなくなってくる。つまり、低湿地では遺跡精製がやや分散的になってくる傾向が看取される。この動きは、扇状地中・段丘上集落の増加と相関している。特

に庄内式期の古墳時代初頭には、小規模な集落遺跡が段丘上に盛んに形成されるようになり、淀川左岸地域では、沖積地に面さない船橋川・穂谷川・天野川上流域にも集落遺跡が多数みられるようになる。

このように、弥生時代・古墳時代初頭には、段丘・扇状地に集落増加していくが、沖積地集落は残存続ける。これは水田に隣接する集落が、流水堆積あるいは越流堆積による地形変化に適応して小刻みな移動を繰り返すパターンが維持されていたことを示しているのであろう。ただし、人口増加の中で、新たな集落開発地は段丘上・扇状地中部・丘陵上へと展開し、水田経営地と離れた集落形成も現れることがわかる。このような、段丘上居住地の増加は、沖積地の環境変化の影響をうけにくい農耕地と居住地の関係が形成されてくることを示唆している。これは、農業経営だけでなく、水害や地形変化に対応する社会構造の変化とも連動する可能性がある。

さらに、墓地形成の状況にも変化みられる。弥生時代後期には、当該地域は方形周溝墓をはじめとする埋葬施設は全く検出されていない。この時期、集落と墓地の関係は不明瞭となる。ただ、集落・居住集団単位で造墓活動を行うこと自体はなくなっている状況と考えることはできよう。

集落と墓地の関係の変化は、こういった低湿地に隣接しない集落の増加がみられる古墳時代初頭には、さらに進行する。この時期には、淀川右岸では安満遺跡の背後に安満宮山古墳がつくられ埋葬主体部からは中国鏡が出土している。この墳墓は庄内式期後半～布留式期初頭の築造年代が想定されている。また、淀川左岸には中宮ドンバ遺跡で庄内式の墳墓が段丘尾根上に2基確認され、鉄器副葬が確認される。この方形墳墓は内装主体が中央部に1基確認され、複数埋葬が多い弥生時代方形周溝墓とは様相が異なっている。淀川右岸でも左岸でも、領域内の特定の場所（桧尾川上流丘陵や天野川河口段丘）にだけ段丘・丘陵上に副葬品をもつ墳墓が築かれ、他の領域にはそのようなものはみえない。弥生中期まで各集落展開地域にそれぞれ、居住集団が近接地に造墓活動していたものとは異なり、特定の小地域にだけ、特殊な墳墓が形成されるようになる。これは庄内式以後、集落と墓地形成の関係が大きく変化したことを示している。水田経営可能な低湿地から離れた集落の増加とともに、造墓活動のありかたに大きな変化が起きていることは注目されよう。

(2.2) 古墳前期～中期 (AD 4C～5C)

古墳時代前期(図5)になると、様相は変化をみせはじめる。特に淀川右岸の高槻市・茨木市地域では、扇状地中部・段丘上の居住遺構検出地点が増加する一方、低湿地の検出地点は減少し始める。この傾向は、もともと低湿地面積の小さかった淀川左岸でも確認できる。このように、現象上は、低湿地から居住地形成が撤退していくようにもうかがわれる。このことは、水田耕作地と集落が隣接地ではなく離れた地点に形成されていく傾向を示している。

この傾向は古墳時代中期～後期(図6・7・8)には決定的なものになる。この段階では、低湿地の居住地点検出例はきわめて僅少な存在となる。同時に、芥川が北摂丘陵部から流れ出た地点に溪せいされている扇状地下部～低位段丘地形部に位置する遺跡形成地点が著しく増加する。特に、郡家川西遺跡では、広い範囲にわたって集落遺跡形成がみられる。竪穴住居や掘立柱建物の検出数も多い。また、安威川流域でも、千里丘陵から河川が平野部に展開し始める領域に遺跡が集中し始める。この段階において、集落と耕作地は領域的に分離される傾向をもち、低湿地では水田の隣接地にその耕作

を行う集団が居住する状況はまれな例となっているように思われる。このことは、水害と農業経営・集団間との関連で解釈すれば、水田可耕地が大きく広がる領域から居住地の多くが分離していく状況へと完全変化を、古墳時代中期に遂げていることととらえることができよう。

さらに、低湿地領域の狭い淀川左岸の段丘上では、古墳中期に居住遺構検出地点が特定の範囲に集中するような傾向もうかがわれる。穂谷川右岸段丘上の阪遺跡や小倉東遺跡とその周辺などである。つまり、淀川右岸で確認された水田適地領域との関係というだけでなく、集落立地地点の集約化がみられるのである。このことは、水田適地から集落が離れ、個別の集落と耕作地の関係が不明瞭になるだけでなく、集落配置相互の関係も耕作地選択とは関係ない理由から再編されていることを示している。集落の低湿地からの撤退は、居住値が水害をさけるといった観点からだけ評価するべきではなく、大きな社会関係の変化が古墳時代中期に達成されたと考えるのが自然であろう。

こういった、地形による集落立地の変化は、集落分布図だけでなくその定量的分析によってもは切とわかる。図9は淀川右岸（島本町・高槻市・茨木市域）の居住遺構検出地点数の総体比の変化を示したもののだが、弥生時代～古墳時にかけて、集落立地が低湿地よりも扇状地中部・段丘・丘陵上の事例が増えていく傾向がみられるだけでなく、その傾向が古墳時代前期以後に強まり、特に古墳代中期に顕著となることがわかる。さらに、詳細なグラフ変化を読み取ることが許されるなら、古墳時代中期に極端に低湿地集落形成比率が減少した後、古墳時代後期にややその比率が増加している。これは、今研究ではデータ取得ができていないが、一般に7-8世紀にも低湿地部に集落遺跡が展開することは知られていることを考えれば、古墳時代中期の集落立地はやや特殊な状況とも言えよう。このことについては、後章で詳述したい。

(2.3) 淀川流域の墳墓・古墳動態との関連

・淀川右岸地域の弥生時代の居住集団と墓地形成

上述のように、集落遺跡形成地点の定量的変化は、丘陵、段丘、扇状地、後背湿地・自然堤防帯といったバラエティに富む地形をもつ、淀川右岸においてより明瞭にうかがわれる。では、こういった集落立地の変化は、墳墓・古墳造営とどのような相関をもつのであろうか。また、単に集落遺跡の立地環境だけでなく、その遺跡の性格の変化とはどのように連動する/しないのだろうか。

まず、淀川右岸地域の弥生時代の墳墓形成であるが、これについては先述のように、低湿地に多く位置する集落遺跡の傍らもしくは重複するように検出される例が多い。安満遺跡や東奈良遺跡はその典型例といってよいだろう。郡家川西遺跡や梶原西遺跡などのように近接する調査区域に集落遺跡が確認されにくい例もあるが、方形周溝墓群そのものは沖積地を中心に形成されており、水田可耕地およびその耕作主体となる居住集団から大きく離れていない地点に立地していることが多いと判断できる。また、弥生時代後期に、高槻市古曾部・芝谷遺跡のように大規模な丘陵上集落遺跡が形成される場合には、集落と近接して少数の周溝墓が築かれている。これら、弥生時代中～後期の方形周溝墓群の性格については、別稿で藤井整が言及しているように、明確な個人階層を示す傾向はなく、基本的に出自集団や居住集団が形成している共同墓地といった性格が強いと考えられる。弥生時代の方形周溝墓群については、墓地形成地点や墓地内部の構造のいずれをとっても、居住集団もしくはそれを構

成し、複数の地点で相関をもつ親族集団が形成していると考えられるべきであり、複数の領域の集団を統合して形成される墓地とは考えにくい。

・淀川右岸地域の古墳形成と集落動態

一方、淀川右岸領域では、近年、中小河川や丘陵ごとに形成される古墳における古墳造営動態の整理が盛んにおこなわれている。阪口英毅（阪口 2011）や森田克行（森田 2011）の古墳動態整理が現状で最新の見解と考えられ、それを参照しつつ集落動態との相関をまとめたい。両氏とも、同地域の古墳を、桧尾川兩岸の安満グループと天神山グループ、芥川右岸の奈佐原・土室グループ、安威川右岸の安威グループ、佐保川流域の千里東麓・福井グループに分けて整理している。先にも触れたが、古墳時代初頭には安満グループに安満宮山古墳が築かれ中国鏡を含む副葬品が目目を引くが、その後古墳時代前期には、奈佐原・土室グループでは芥川右岸丘陵を中心とした岡本山古墳・弁天山古墳群で主要古墳が連続的に形成される。またその西部域でも鬮鷄山古墳や焼山古墳がみられる。さらに古墳前期では、西方の安威グループでは將軍山古墳や安威古墳群が形成され、福井・千里丘陵東部グループでは比較的多数の鏡副葬をもつ紫金山古墳が確認できる。このように、古墳時代前期には、各古墳形成グループともに、主要な古墳を築いていることがわかる。この古墳形成単位領域は、当然ながら弥生時代の居住集団ごと（おそらく径1-2km範囲ごと）の墓地形成に比べれば、水系ごとや径数～10km規模での領域ごとにみられることになり、墓地形成の単位となる領域は大きくなっている。この点は地域首長形成などが墓制の上で明確に読み取れる点である、ただ、水系ごとに読み取れる各領域で墓地形成を行っているという状態である。集落形成地点は、図5にみるように、特定の水系や丘陵上に偏ることはなく、集団形成領域の地理的バランスに呼応して古墳群形成が確認できることになる。

古墳時代中期には、この状況は一変し、淀川右岸地域では、大規模墳墓や多数副葬品を持つ古墳形成が奈佐原・土室グループに集中し、特に太田茶臼山古墳の存在は目を引く。集落分布についてみると、先に指摘したように、各中小河川流域ともその内部で集落立地は変化し、沖積地集落が減少して段丘や扇状地下部の集落数が増加する。しかし、福井・千里丘陵東部グループは、中期に主要古墳を形成しないが、集落数が減るわけではない。桧尾川兩岸の安満グループと天神山グループや安威グループも状況は同じである。各中小河川流域での集団数の盛衰には古墳時代を通じての大きな変化はなさそうである。しかし、集落の質には一定の差異が見られ始める。奈佐原・土室グループの集落は、中期に増えるわけではないが、新池埴輪窯のように、専門性をもった集団が現れる。また、郡家川西遺跡周辺で、集約的な集落分布が確認されるようになる。一部には鍛冶遺構を伴う集落もみられることが、本書別稿で真鍋成史が指摘している。

また古墳時代後期には、奈佐原・土室グループの今城塚古墳の存在はみられるものの、各中小河川流域上流の丘陵上に群集墳が形成され、造墓活動に中小地域グループごとの差異は顕著ではなくなる。もちろん、集落分布は若干低湿地集落増加傾向をみせながらも各流域に大きな変動はない。

つまりは、淀川右岸では、古墳前期までは、弥生集落の各遺跡群におおむね対応して大中規模古墳造営される、古墳中期から大中規模古墳造営地域が限定。この地域では鍛冶生産・埴輪生産など特殊専門集落あるということになる。この状況は一定程度後期にも引き継がれるが、おおむね前期同様に

中小河川流域後との差異は減少する。とすると、古墳前～中期の変化は首長（墓）系譜の移動といった観点ではなく、古墳造営・地域統合の領域そのものの変化と考えるべきなのかもしれない。この点は、淀川左岸の状況も考慮して整理する必要があるだろう。

・ 淀川左岸の古墳形成と集落動態

先述のように、淀川左岸においては、弥生時代中期には集落に近接して、もしくは集落立地の主要地形である低湿地もしくは段丘縁辺に方形周溝群（招堤中町遺跡・交北城ノ山遺跡・星ヶ丘西遺跡・大尾遺跡など）が形成され、弥生後期には墓域は殆どみられなくなり、古墳時代初頭になると淀川望丘陵上に副葬品を伴う墳墓（中宮ドンバ遺跡）が確認される。

古墳時代に入ると、同地域の各所に古墳が造営される。それらは主に、穂谷川流域・天野川中下流域・天野川上流域（交野山地西麓）のグループに分けられる。古墳時代前期には、この3地域でそれぞれに中～大規模の前期古墳が形成されている。しかし、古墳時代中期には中・大規模古墳の形成に偏りがみられるようになる。注目されるのは、天野川上流域において古墳時代前期に丘陵部に森古墳群が形成されたのち、中期には扇状地中下部を中心に車塚古墳群が形成されることである。特に前者では古墳時代前期初頭に鍋塚古墳などがあり定型的前方後円墳成立期の動きとして注目されている。このように、天野川上流域は古墳時代前中期に一貫して淀川左岸地域の大規模古墳造営の中心であった。この地域の集団が、淀川左岸古墳時代社会において中心的な存在であったことがわかる。ただ、前期の森古墳群から中期の車塚古墳群への立地変化には留意しておきたい。

この天野川上流域における近距離での古墳群形成領域の移動は、近年行われている集落調査にも表れている。扇状地下部に相当する上私部遺跡では古墳時代中期に径300mを超える集落が成立していて、大型掘立柱建物などもみられるようになる。また、車塚古墳群に近接する森遺跡では鍛冶炉や鉄滓が多量に確認され、鉄製品生産の拠点として機能しているようである（本書の真鍋氏論考を参照）。古墳時代中期に主体となる中大規模古墳形成領域の傍らに、専業生産を含む大規模集落群が形成される現象は、淀川右岸の郡家川西遺跡周辺の減少に酷似しているといえよう。同時に、先述のように村野遺跡周辺に天野川中流域の集落形成が集中する現象も看取される。扇状地中下部や段丘上、特に主要古墳群の形成領域近くへの集住は、淀川右岸と共通する現象ともいえよう。

また、古墳時代に入ると、船橋川流域では集落遺跡数も減少するとともに古墳群の形成も確認できない。このように、古墳時代に入ると小地域間の遺跡形成に差異がみられはじめ、前期においては一定の均等性はみられるものの、中期には特定領域への集落や古墳形成の集中傾向が高まるように思われる。弥生時代にみられなかった遺跡群間の差異が古墳時代にみられはじめ、古墳中期に決定的となるともいえよう。

また、こういった遺跡群間の差異は、古墳時代後期になるとやや変化をみせる。穂谷川流域・天野川中下流域・天野川上流域に加え淀川低地周辺にも小規模な古墳（群集墳を含む）が形成され始める。古墳時代中期に比べ後期には特定地域での集落・造墓活動の集中現象が確認できる。この点も淀川右岸と共通する傾向といえよう。

3. 木津川流域での変化

桂川流域を含む京都盆地の集落遺跡動態に関しては、本書の古川匠の論考・伊藤淳史の論考に詳細を委ねるが、その動態や傾向を要約すれば以下のようなだろう。

弥生時代～古墳時代初頭を通じて遺跡数の多い桂川流域については、弥生時代前・中期には低湿地から扇状地下部に遺跡が多く形成され、特に弥生時代中期には神足遺跡とその周辺などに居住域が未収して形成される領域が展開する。しかし、弥生時代後期以後は、桂川右岸領域の広い範囲に共住域が展開するようになり、特定地点への集中ではなく、分散的に、しかし多くの居住集団が展開する構図となる。以上は伊藤による分析結果といえよう。

古川匠が整理した古墳時代の遺跡動態としては、古墳時代前期には向日丘陵とその縁辺の低地部に集落が多く分布するものの、古墳時代中期には低地部の集落数が激減して、丘陵部に散見される程度なることが報告されている。また、古墳時代後期にはこの傾向は少し緩み、集落数増加傾向がうかがわれるという。また、上記の変化の傾向については、柏田有香・古川匠・浅井猛宏（柏田・古川・浅井 2016）による分析でも指摘されているところである。

ここでは、上記の桂川流域の分析例に加えて、木津川流域を加味して弥生時代前期から古墳を通じての変化について論じたい。これについても柏田らによって弥生時代後半～古墳時代について論及されており、大枠ではその見解に異論はない。ここでは集落立地の変化についての大きな流れを確認したい。

図10～16を木津川流域に注目して確認してみたい、弥生時代前期の集落遺跡立地は木津川流域の低地部が多く、丘陵や段丘上の集落はほとんどみられない。これは、淀川流域同様に低湿地に水田地の傍らに当該期の集落が営まれていたことを示している。ただ、弥生時代中期になると、丘陵上の立地する遺跡が増加する。一方、平野部の遺跡は存続する。この段階では、集落遺跡とともに方形周溝墓群を営む遺跡も散見される。また、丘陵上集落といっても低地を望んだ立地が多い。墓群が平野部にみられることを考えると、集落に近接して両者が存在したことがわかる。また、巨椋池の南西岸では、大規模遺跡と考えられる市田齊当坊遺跡で複数の居住域と墓群が確認されている。先述の桂川流域での神足遺跡形成状況と同じ状況と考えられる。

ただ弥生時代後期になると、このような大型集落遺跡は、巨椋池南岸や木津川流域の低地部には確認できない。一方、木津川流域平野部南端に面する丘陵上には、木津川市木津城山遺跡や木津川市椿井遺跡などで弥生時代後期の集落や墓地が確認されている。これらの集落に一部は庄内期にも継続しているようでもある。このように、巨椋池以南の木津川流域では、弥生時代中期に平野部での居住集団形成の集中が緩和して後期に丘陵上集落の比率が高まる状況が看取され、古墳時代初頭まで継続するようである。これらの傾向は、桂川流域で平野部弥生後期～庄内式期に分散型の集落部分布傾向が指摘されていること（伊藤 2014）と呼応する現象といえよう。

古墳時代前期には、巨椋池以南の木津川流域では遺跡減少する。一部、巨椋池委南西岸の佐山遺跡で庄内式～布留式初頭の集落形成が拡大するものの、それは継続しない。さらに柏田ら（柏田・古川・浅井 2016）が指摘するように、中後期にもこの地域では遺跡数少ない。遺跡調査件数が多いのは現

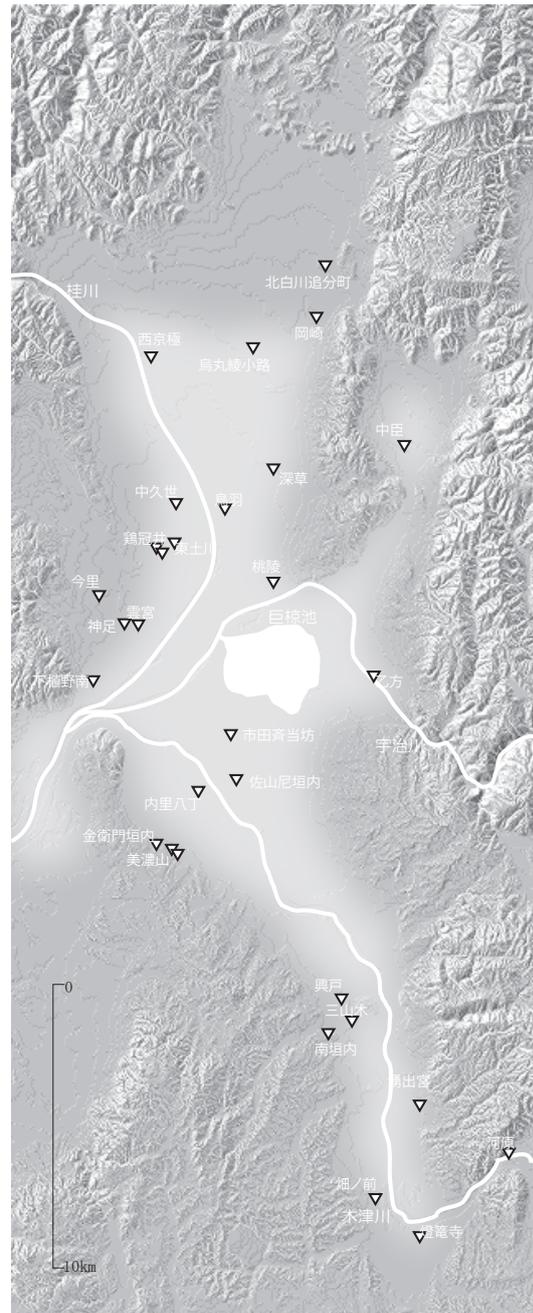
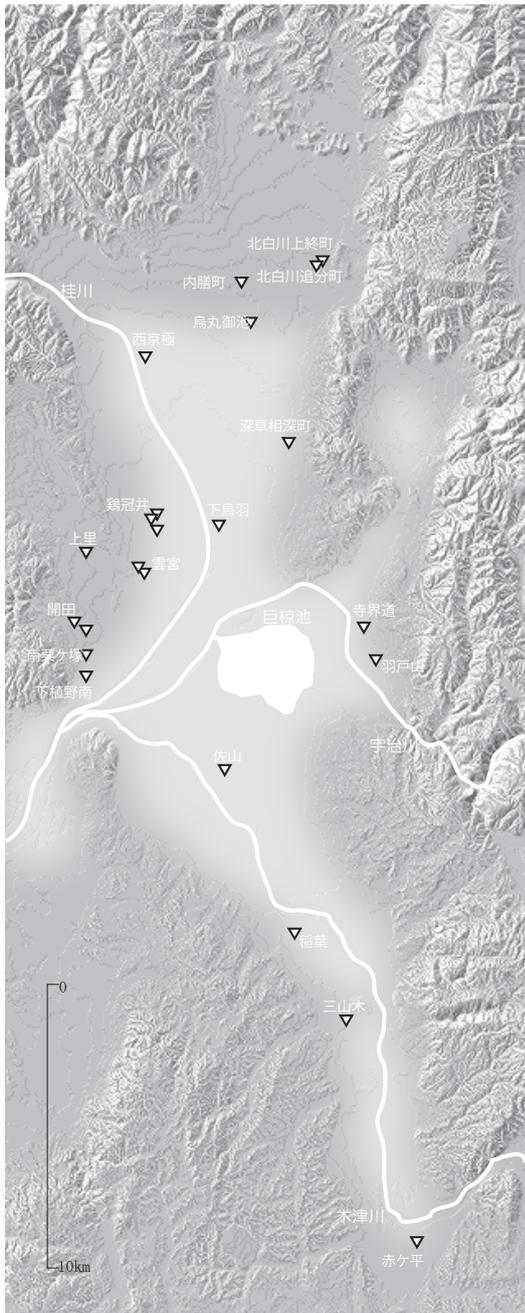


図10 京都盆地・木津川流域の弥生前期遺跡分布 図11 京都盆地・木津川流域の弥生中期遺跡分布

代開発の多い平野部だと考えられるため、平野の集落形成が減少していると考えられるべきであろう。こういった古墳中期に明確化する、低地部の集落減少傾向は、桂川右岸地域で指摘されている動態（古川 2014や本書で古川が指摘）とも軌を一にする傾向と言えよう。

最初に述べたように、この地域では、古墳時代前期前半に椿井古墳群、中期には久津川古墳群造営など大規模古墳の造営地点が変化することが、地域内の首長墓・首長系譜の変動現象と結びつけられて論じられてきた。しかし、古墳時代中期の木津川流域では全体的な（主に平野部中心に）集落形成

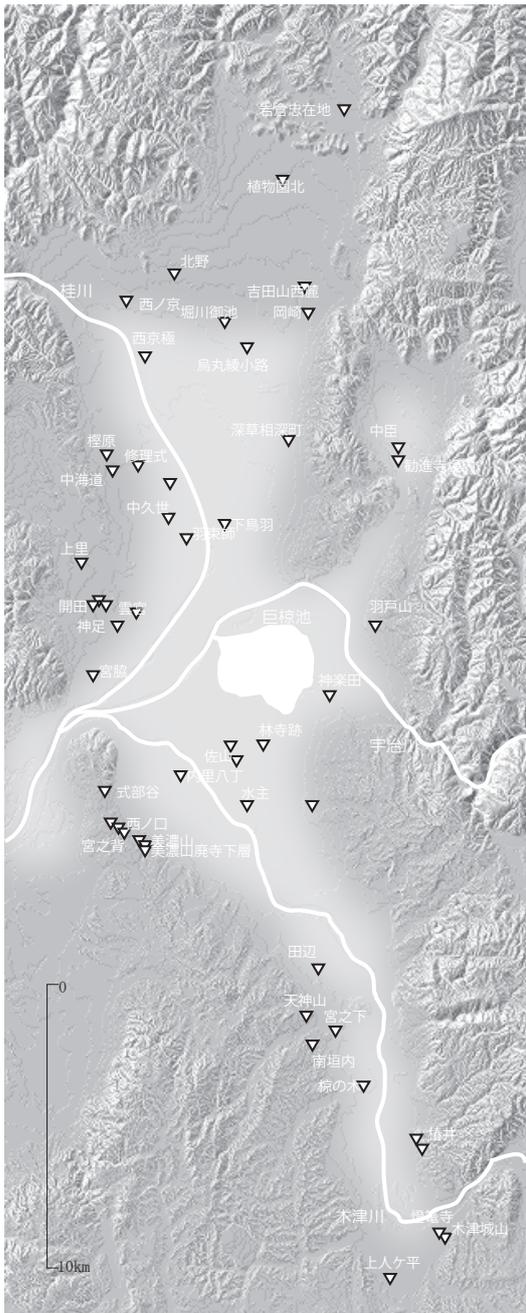


図12 京都盆地・木津川流域の弥生後期遺跡分布

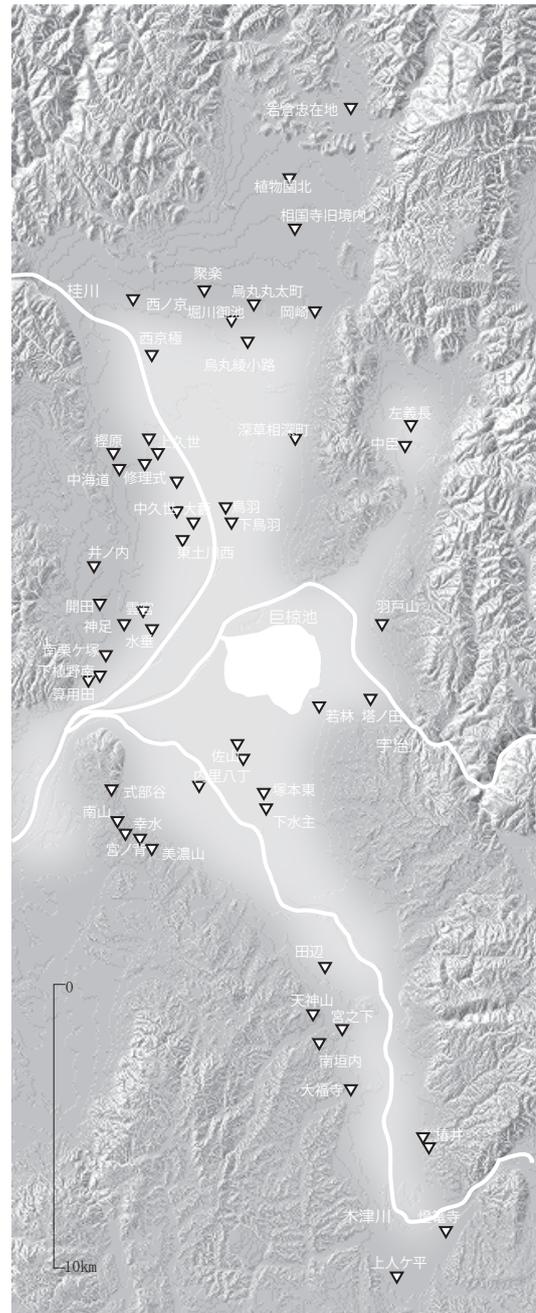


図13 京都盆地・木津川流域の庄内式併行期遺跡分布

数が減少することとは連動するものの、特に久津川古墳群へ近辺での人口増加などは看取できない。淀川右岸でも、大規模墳墓の集中現象は、各小地域の遺跡数の差異とは連動しないことは先述の通りである。ただ、芥川流域集落での埴輪や鉄生産などの特定手工業生産の集中はみられた。淀川左岸でも古墳時代中期の車塚古墳群近くでの鉄生産集落の隆盛も確認できた。しかし、現状では、木津川流域地域で久津川古墳群近辺にこのような現象が確認されてはいない。淀川両岸にみられる大規模古墳造営とその近辺の集落遺跡の性格変化の連動は、京都盆地～木津川流域平野部では確認できないとい

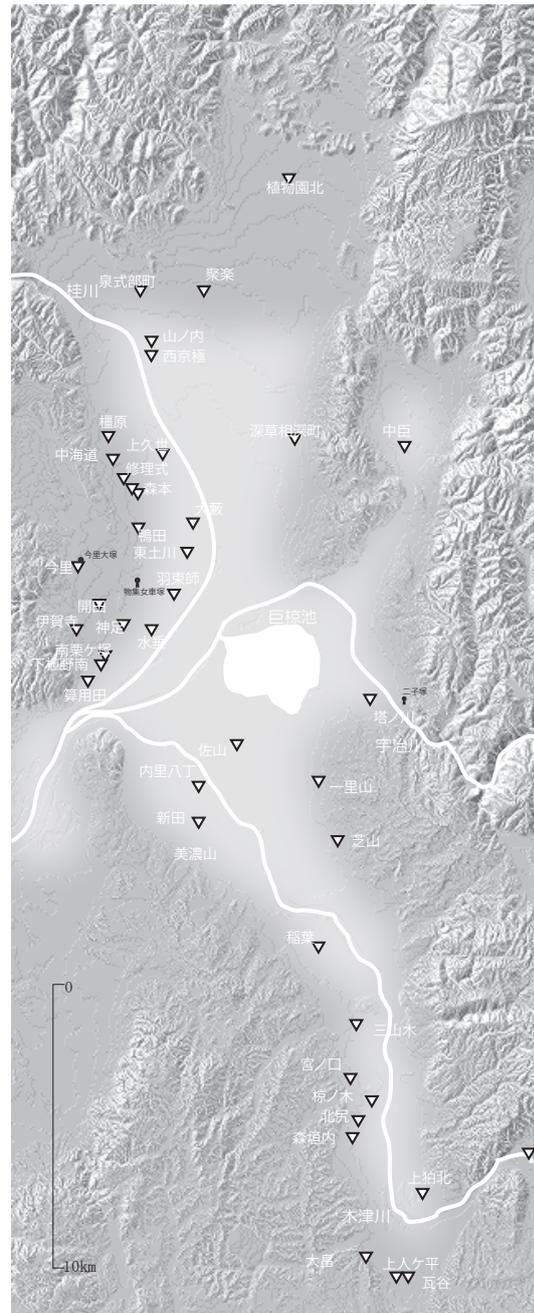
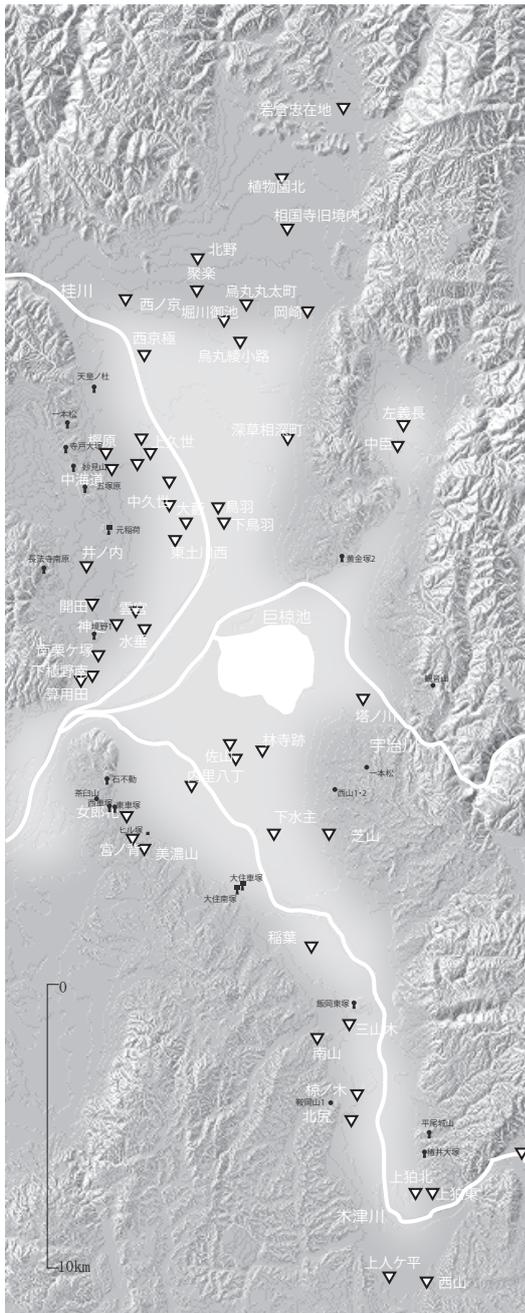


図14 京都盆地・木津川流域の古墳前期遺跡分布 図15 京都盆地・木津川流域の古墳中期遺跡分布

うことになる。領域全体での平野部集落の減少傾向は広く共通するものの、淀川流域と木津川流域では古墳造営と集落内容の変化のありようには差異がみられることとなる。

京都盆地～木津川流域での古墳時代集落変化の特徴と古墳造営については、同様の指摘を柏田らが行っている。柏田ら（柏田・古川・浅井 2016）は奈良盆地あるいは大阪平野南部の王権勢力とのかかわりで造墓活動が展開した結果として、久津川古墳群など古墳時代中期の主要古墳の形成の理由を理解することを提案している。領域内の社会構造ではなく、広域の政治関係の変化がこの地域の古墳

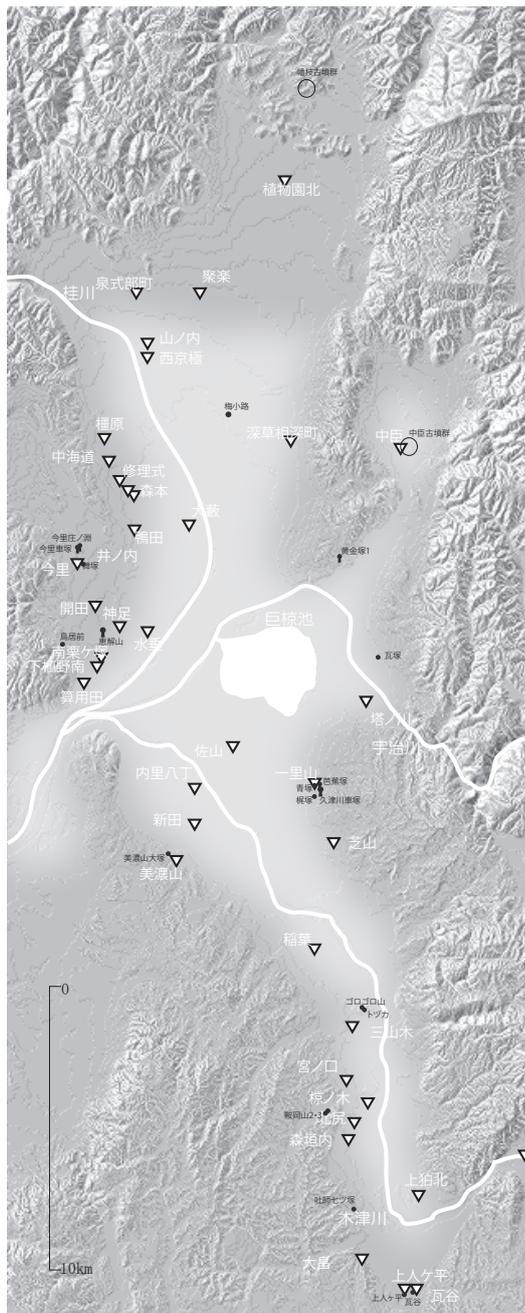


図16 京都盆地・木津川流域の古墳後期遺跡分布

形成に与えた影響を重視する視点である。このような解釈は十分考慮する必要はあろう。ただ、桂川右岸地域では、古墳時代中期に南西部の下植野南遺跡で鉄生産が確認できるようになると、比較的それに近い位置に大規模な恵解山古墳が形成されるなどのうごきもある。これは同地域の東半部の集落遺跡が極端に減少してその領域の造墓活動が弱まる時期にも符合している。今後の調査成果によっては、理解の枠組みが変化していく可能性はある。

このように、古墳時代を通じてどの地域にも集団は展開するが、中期に偏在や特定手工業生産がみ

られる小地域や、それが大規模墳墓造営と連動している可能性はある。さらに繰り返すが、長期傾向をみると弥生時代特に前半期にくらべて、低湿地遺跡の数は減少傾向になる。可耕地に寄り添う集落形成からの変容が古墳時代に進行すること自体は、淀川・木津川水系全体で共通している現象といえよう。また、そのような状況が一つの確立を見る時期が古墳時代中期であることは確認できそうである。

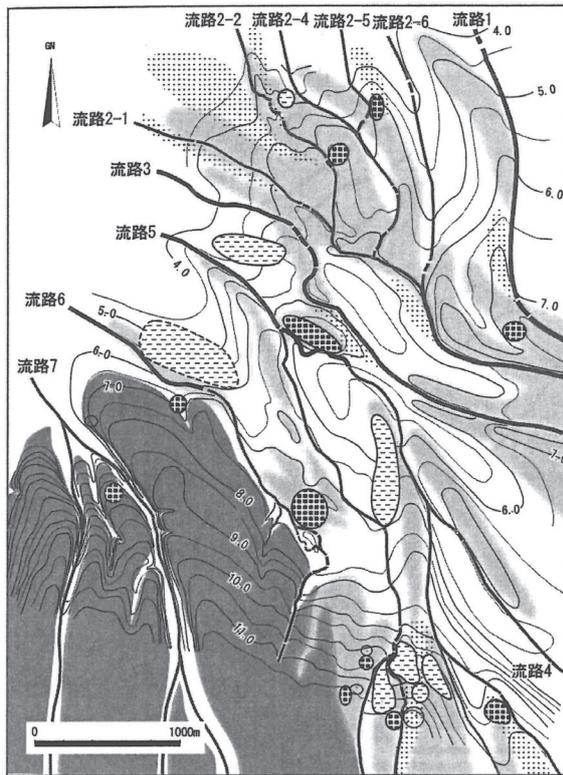
4. 比較例～大阪平野中部での分析例と研究状況～

ここでは、上記淀川流域・木津川流域の弥生時代～古墳時代集落変遷を考えるうえで比較対象となる、大阪平野中部特に河内湖南岸部の状況について確認したい。弥生時代の集落遺跡立地については、拙稿で弥生時代中期の方形周溝墓群で有名な瓜生堂遺跡とその周辺での遺跡変遷を検討している。(若林 2001・2008・2016b)。

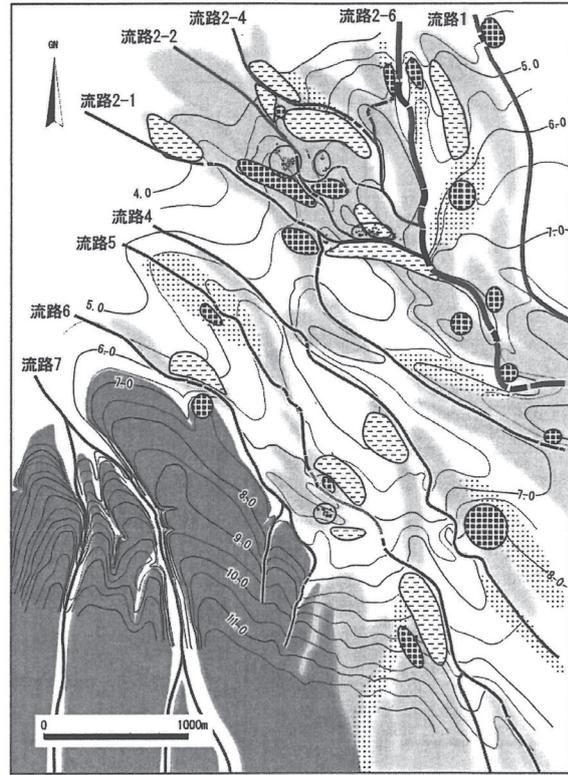
図17は、河内湖南岸遺跡群における弥生時代前期～後期の居住関連遺構の検出地点を示したものである。居住関連遺構とは、竪穴住居・柱穴・土坑・井戸・小溝などである。これらは、いずれもは居住域に伴って検出される遺構である。各記号のうち、○は前期、△は中期、□は後期を示している。また3時期の中でも、細分して色を変えている。これは居住遺構から出土する土器の編年状の時期によって細分している。つまり、同形態・同色の記号の分布は土器型式上の細分時期ごとの居住遺構検出地点の分布を示している。

この図が示す一番重要な点は、対象地域のなかから、弥生前期前半～後期後葉の間で、居住遺構検出地点がなくなる時期はないということである。分析対象とした領域は、瓜生堂遺跡・若江北遺跡・巨摩遺跡・山賀遺跡の範囲にあたるが、およそ東西1～1.3km、南北1.5～2kmの範囲にわたる。この最大2.5km²の範囲には、どの細分時期においても、常に4～8か所の居住遺構検出地点が確認されており、それは一か所に集中することなく約2km²の範囲内に分散している。この領域は、弥生時代においては河内湖南岸部の三角州堆積地域にあたり、旧大和川水系の網状河川が展開する低湿地地帯であった。当然、雨量の多い時期には流路からの越流などが起こり、破堤や越流堆積物による小規模砂堆の形成による地形変化が頻発していたことが予想される。

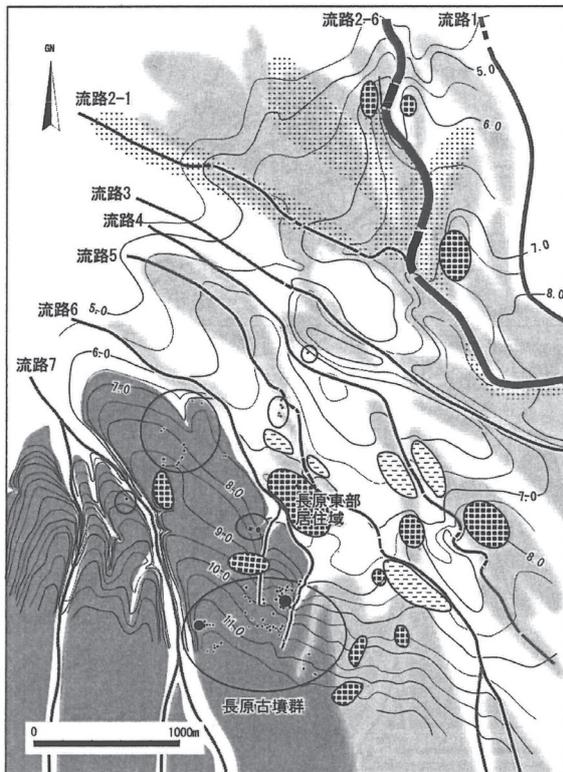
にもかかわらず、約100m程度の規模と考えられる居住域は一定領域（1～2km²範囲）の中で展開し続ける。もちろん地形変化に対応して、居住域は小刻みに移動している状況は確認できる。しかし、各居住域の移動距離は小さく、おそらく数百mの範囲内に収まると考えられる。また、この領域内における、居住域数の増減もあまり大きくない。弥生前期～中期前半には、細分時期ごとの居住遺構検出地点は5箇所程度やや少なめである。弥生時代中期後半～後期には、細分時期内でのその地点数は多めになる。特に中期後半には遺跡群のやや北部の居住遺構検出地点がやや比重をます傾向がある。ただ、それでも南端部の山賀遺跡の範囲内にも遺構分布は確認され、領域内部で数百m範囲が完全に放棄され集落がなくなる状況は確認できない。もちろん、土器編年上の細分時期の間にも一定程度の時期幅は想定され、図16で示した同時期の記号の地点に居住域が同時に存在していたことは証明できない。しかし、上記の範囲内では同記号の地点が複数みられることから、少なくともこの分布



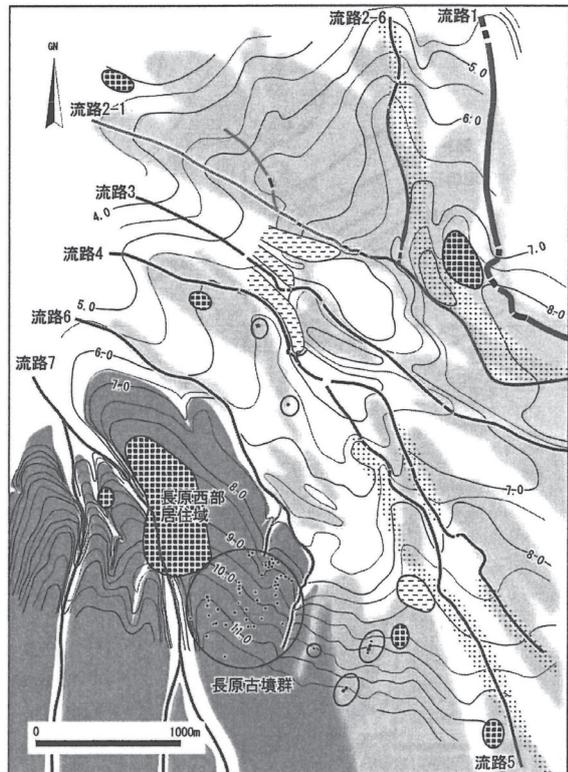
⑤ 弥生時代後期後半の古地形と集落分布



⑥ 古墳時代前期の古地形と集落分布



⑦ 古墳時代中期前半の古地形と集落分布



⑧ 古墳時代中期後半の古地形と集落分布

凡例：■ 段丘 ■ 沖積リッジ ■ 前時期の氾濫堆積層の分布 ■ 居住域 ■ 水田 ■ 墓域

図18 長原遺跡近辺での集落配置変化 (大庭 2016より転載)

州性堆積環境を中心として、低湿地の水田可耕地の傍らに居住域が形成されることが一般的であったと考えられる。なお、一方で、東大阪市～八尾市池島・福万寺遺跡では、居住域が明確でないのに広大な領域に水田が確認される例が弥生時代に認められる。弥生時代にも、集落脇に水田が形成される個別経営型の耕作地形成と、複数の集団が共同して経営する広域水田の2種があったと考えられる。

さらに大庭（大庭 2014・2016）は、大阪平野中部の長原遺跡・亀井遺跡・久宝寺遺跡・加美遺跡の弥生時代～古墳時代の微地形復元と遺構変遷から、詳細な居住域と水田域・墓域の動態を示した。この中で、大庭は、個別の居住集団の動向と連動して水田域が移動し、弥生中期後半には亀井遺跡域への居住集団の集中が進むとともに、北方の久宝寺遺跡や加美遺跡の領域に開発域が広がるとした。そういった開発前線に階層化の進んだ加美遺跡Y 1号墓などが形成されるとした。集団動態と水田開発の発達を弥生中期後半にみとめ、それが墓制上の階層化傾向と連動することを明らかにした。さらに、大庭は、居住域と生産域の分離が進み、集落活動領域が拡大することから、この時期に実質的な地域社会の形成が進んだと考えた。大庭の研究の中ではっきりしたことは、弥生時代においては流路移動や流水・越流堆積による地形変化に応じて、小集団が移動や結合を繰り返しながら、数km範囲内でテリトリーを維持しつつさらに拡大していく様子である。さらに古墳時代中期には、この状況は一変して比較的高燥な地点（大阪平野中部では低中位段丘上）に集落が集中し、可耕適地から集落がはなれて特定の立地に居住地が集中していく現象がみとめられることになる。（図18・大庭 2016より転載）この場合には、複数の集団が水田を共同経営する状況が主体となったことが想定され、社会的統合の発達を示している。淀川流域での集落立地の変化も同様の動態を反映している可能性は高い。

筆者の弥生時代の集落分析に加え大庭の分析が示したことは、微地形レベルでの分析でも淀川流域で確認されたような弥生時代と古墳時代中期以後との集落立地に大きな差異がみられることである。

この変化が社会的にどのような意味を持つのかについては、次節で詳述したい。

5. 弥生～古墳時代変化および古墳時代社会の特質について

上記の淀川・木津川流域（京都盆地含む）の、集落と墳墓の分布の変遷をみると、そこには小地域ごとの差異とともに、重要な共通性がある。その共通性は以下の5点と考えられる。

- (a) 弥生時代～古墳時代にかけて集落立地地点の中心が、後背湿地・自然堤防帯などの低湿地から、扇状地中下部や低中位段丘上へと変化する。弥生時代に低湿地での集落形成が多い理由としては、水田可耕地に隣接して居住地を設ける状況、つまり個々の集落に付帯して水田経営がなされることが多いことを示している。古墳時代にはそういった経営の個別性に変質する可能性が高い。
- (b) この変化の進行は、沖積地面積の少ない地域（淀川左岸・木津川流域）では早い段階（古墳時代前期）に明確化するが、低湿地集落数の減少が明確になる時期は古墳時代中期である。
- (c) 上記の集落分布の変化はみられるものの、大規模墳墓造営の有無にはかわらず、弥生～古墳時代を通じて各小河川流域に集落群そのものは存在し続ける。古墳時代中期の大規模墳墓の集

中の目立つ地域にだけ人口集中が認められるわけではない。

- (d) 古墳時代中期には、地域によっては鍛冶生産や埴輪工房などの専門的集落の存在が確認されはじめる。それは、古墳時代中後期に大規模墳墓を造営する領域に近い場所であることが多い。
- (e) 地域によっては、古墳時代後期あるいは古代には集落分布の高燥地への集中傾向は若干緩和され、低湿地集落の数は増加し始める。同時に、中小河川流域ごとに背後の丘陵部に群集墳を形成し、その内容に小地域間の大きな階層的差異はみとめにくい。

(a)・(b)からは、モデル図19を描くことができる。筆者は、別稿(若林 2001・2008)で、水田耕作地や墓域が付帯した弥生時代の居住集団のことを基礎集団と呼んでいる。(a)・(b)からは、基礎集団の個別的な水田経営要素から、協業的農耕地配置・経営へと移行する方向性を確認することができる。この共同性の高まりは領域的秩序が形成されないと進行せず、弥生中期を典型とする、集団関係だけでは形成されにくい。言い換えれば、上述の弥生時代から古墳時代への集落立地や集団形成の特徴の差異・変化はそのプロセスを間接的に示していると言えよう。

また、(c)からは、特に古墳中期に明確化する社会変化が確認できる。先述のように、小地域社会内部では水田耕作地の管理経営に統合化が進行する。さらに、(d)からは、同時に専門生産の強化傾向みられることになる。それに大規模墳墓形成が連動することになる。しかし、専門生産明確でない地域でも大規模墳墓形成はある。柏田・古川・浅井らが明らかにした木津川流域での集落動態の現状は、専門生産活動が確認されにくい地域でも、古墳時代中期に大規模墳墓群(地域首長墓)が形成されることを示している。これについては、集団間関係の変化を王権との関係での変動という理解(柏田・古川・浅井 2016)を適応する余地がある。しかし、あくまで王権と地域集団の関係だけでなく、各領域での水田耕作をめぐる個別経営性の減退と統合化が背景にあることは確認しておきたい。(a) (b) (c) と (d) をあわせれば、統合化は専門性の高まりと相関することがわかる

一方で、(e)のように後期には上記の個別経営の傾向は緩む。このことは、おそらく中小河川古語に進行する大規模経営傾向が一番高まるのが古墳中期といえよう。その傾向が緩むと地域間の際が明示されにくい群集墳形成が各地で進むという理解が可能であろう。

淀川・木津川流域で観察された上記の要素の変化を図式化してみよう。上記分析から考察することの可能な社会変化要素としては「経営の個別性」「専門化傾向」「集団間・地域間差異(政治的地位)の明示」である。「経営の個別性」は集落立地がその判断材料となり、「専門化傾向」については鍛冶生産集落や埴輪工房の存在と立地が注目されるだろう。また、「集団間・地域間差異(政治的地位)の明示」は、弥生時代であれば方形周溝墓間もしくは周溝墓群間の階層化傾向が、古墳時代であれば大規模墳墓の立地がその観察点となる。この観点から提示できるモデルは図20である。それぞれの要素が「強い」「弱い」を模式化し、変化の曲線の推移を重ねている。

このモデル図をもとにすれば、経営(社会的統合)の個別性が高い弥生時代には専門化傾向や政治的地位の明示は低い状態にある。一方、経営個別性が弱まり地域統合が高まる時期には集団間・地域間差異の明示傾向は高まる。さらに興味深いことは、古墳時代後期への変化の方向性をみると、その

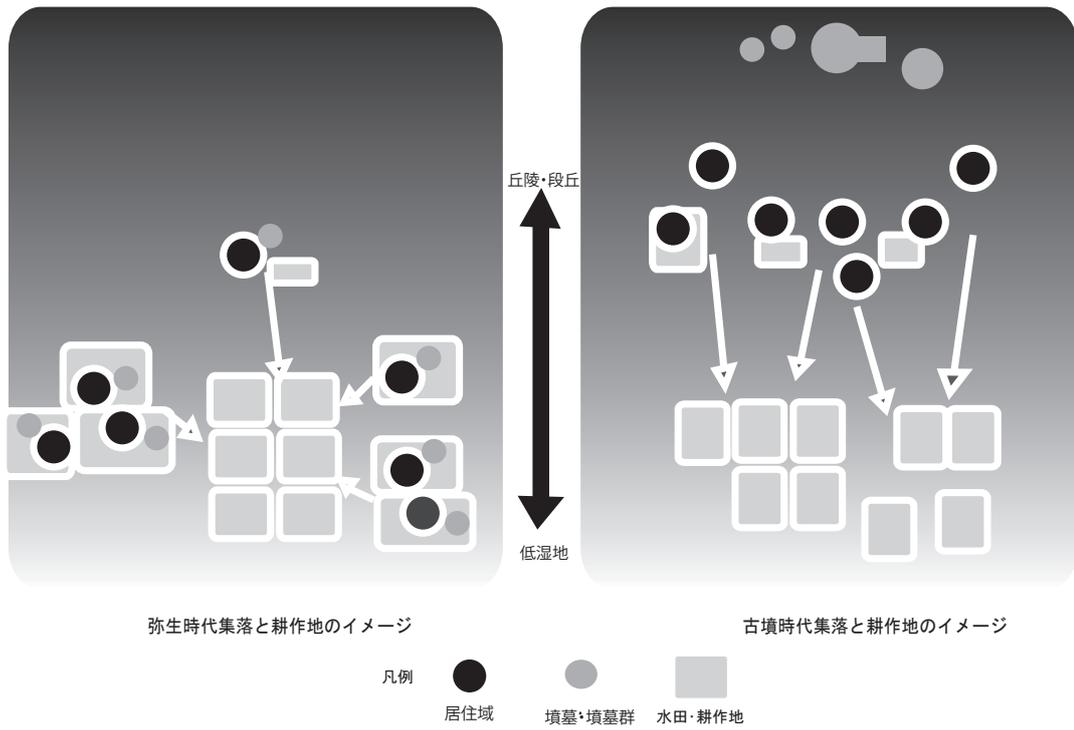


図19 弥生～古墳時代の集落・水田・墳墓をめぐる配置モデル

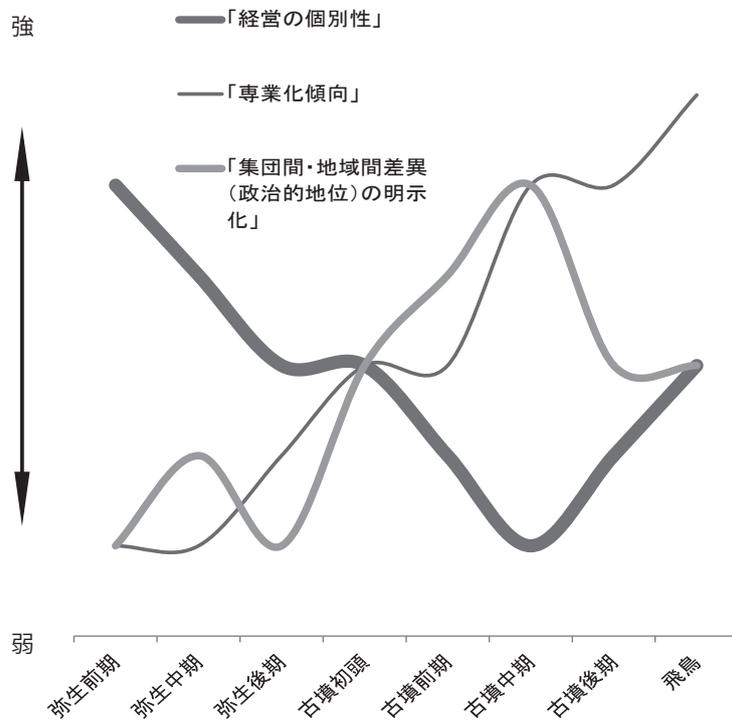


図20 弥生～古墳時代の社会要素の変遷モデル

相関は不可逆的に傾向を高めるだけでなく、経営個別化傾向の再度の高まりによって、集団間・地域間差異の明示傾向が弱まることである。

本研究では分析できていないが、7-8世紀の古代前半社会においては、管見によれば低湿地集落は安定的に存在する。また、8世紀に導入される律令制における農業経営形態は、文献上のこととはいえ各集団（戸）の個別経営性が高いことを前提にした制度設計といえる。このように考えれば、古墳時代中期は個別経営性が極端に低く、それにより統合された小地域間の関係もより階層的になることが予想される。古墳後期以後は、王権や国家制度変質により個別経営の変質（弥生時代と同じという意味ではない。別の形の個別化を想定するべきであろう）が進行し、考古学的には集団間・地域間差異（政治的地位）の明示の必要性は低下する。古墳時代の各地域の墳墓造営の在り方は、「王権とのかかわり」といった列島規模の中心-周縁関係で理解することも可能だが、社会要素の変化との相関で理解し、政治的關係がどのような社会構造変化の方向性のもとで形成されるかという視点でアプローチする必要もあろう。

そこから想定できることは、社会変化要素としては経営の個別性/統合性が急変する時期に、墓制において、統合者（地域首長）の明示や彼らおよび彼らを要する集団間の関係性（階層性）が強く明示されることである。古墳時代社会の形成や変遷については、地域首長間のネットワーク関係の変質が常に注目されてきた。しかし、水田経営あるいはそれに連動する各居住集団（基礎集団）の相関関係の質自体を考慮することによって状況を理解することが容易となる。本研究で明らかにできたことは、水田経営などの個別性が急速に減少する時期に、古墳とそれをめぐる秩序が形成され変質し、その安定化によって、そういったモニュメントが社会装置としての役割を終えていくことである。墳墓に表現される集団間差異の明確化・階層化・複雑化は、集団経営の複雑化の進行時期に高まることがかがえる。

1970年代以前には、こういった要素関係は、史的唯物論の枠組みにもとづく社会的な「生産関係」の発展に基づいて起こると想定され、議論は進行した。近藤義郎（1964・1983）や都出比呂志（1974・1989）はその代表的集大成といえよう。しかし、1980年代以後、墳墓（群）間・古墳（群）間関係の背景に社会構造の差異を強調する論調は低調である。背景には、集落・集団相互間に生じる社会関係の構造を読み取ることが、集落データ増大に反比例して困難になってきたことが挙げられよう。また、経済的側面だけを、社会変化の指標とア priori に想定することへの反発があると考えられる。代わりに、「対外交渉」や「王権」といった政治的タームが議論の中心となってきた。本稿ではそのような方向性とは別に、しかし、単純に演繹的な社会構造発展想定を基盤としない社会構造要素の設定を試みた。結果として、経営の個別性/統合性を集落立地によって想定することによって、議論を進める方向性を提示してみた。弥生集落研究をベースとした筆者の既往の議論（2001・2008・2009）にひきつけて言い換えると、基礎集団の自立性の変質が古墳造営の背景やその終焉と関係しているということになるのか。

6. 結語

古墳の諸要素（規模・形態・副葬品内容）を通じて集団間の政治的関係とその変化を論じることは、古墳のある時代としての古墳時代を考察する上で不可避な態度だとは感じる。また、そこから逆算するように、弥生時代の集団間・地域間関係の（政治発展の）ステージに言及することも理解できる、しかし、他の社会変化の質を考慮せずにその議論を進めても、結局「政治とは何か」についての理解は進まず、結果として墳墓・古墳研究は人文社会科学に貢献することはできない。本研究の目的は、政治だけでない社会要素の復権のための試みである。このような志向を持つ研究者は筆者だけではない。先述の古代学研究会での、三好玄・田中元浩ら中心とした弥生～古墳時代の集落遺跡の変化研究（古代学研究会編 2016）は、子細の研究方法の差異とは別に、同じ問題意識に根差している。本研究はその試み「群」の一つに過ぎない。今後、このような研究方向が盛んになることを祈念して、結語としたい。

引用参考文献

- 伊藤淳史 2005「国家形成前夜の遺跡動態—京都府南部（山城）地域の事例から」『国家形成の比較研究』学生社
- 大庭重信 2014「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』第38号 日本考古学協会
- 大庭重信 2016「地形発達と耕地利用からみた弥生・古墳時代の地域社会—河内平野南部を対象に—」『考古学研究』63巻第2号
- 柏田有香・古川匠・浅井猛宏 2016「事例報告 山城地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会編 六一書房
- 阪口英毅 2011『前期古墳解明への道標・紫金山古墳』新泉社
- 下垣仁志 2012「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第2号
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 坂 靖 2008『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化』雄山閣
- 藤井整 2009「近畿地方弥生時代の親族集団と社会構造」『考古学研究』第53巻第3号
- 古川匠 2014「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（5）」『京都府埋蔵文化財情報122号』（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森田克行 2011『よみがえる大王墓・今城塚古墳』新泉社
- 若林邦彦 2009「集落分布パターンの変遷からみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149号
- 和田晴吾 1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館

